瀬原退藏著作集　第十六

頴原退藏著作集

第十六卷

頴原退蔵著作集　第十六巻
定価　二六〇〇円
昭和五十五年一月一日印刷
昭和五十五年一月十日発行
著　者　頴原退蔵
発行者　高梨茂
印刷者　山田博
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一―九
振替東京二―三四
©一九八〇　検印廃止

目次

江戸時代語の研究
序　一 序説　二 解釈の意義　三 解釈の方法　四 俳諧と俗語　五 七部集の用語　六 西鶴の用語　七 近松の用語　二四六
江戸時代語に関する二三の考察　二五五
江戸文学難語考　三二九
貞門談林俳諧語彙　四〇二
西鶴用語考　四二七
西鶴と近松との用語の二三について――『元禄文学辞典』の著者へ　四四一
「掘出し」考　四四六
「ひきみんたん」考　四五一
「ひきみんたん」再考

ねまる考　四五六
片言と邇言便蒙抄の偽版　四六二
ことわざ　四六六
観音に関する俚諺　四七三
童　詞　四七九
食事に関する言葉の二三　四八六
古俳諧の雪　五〇一
雀色時　五一三
三尺寝　五一八
魚島といふ言葉　五二三
讃岐方言について　五二四
後　記　五二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

近世語研究

江戸時代語の研究

序

言と事と心とは相応ずるものであると宣長は言つた。だから例へば心のかしこい人は、いふ言のさまも、なす事のさまも、それに応じてかしこく、心のつたない人は、いふ言のさまも、なす事のさまも、それに応じてつたないのである。宣長の偉大な古典研究の業績は、言はばこのやうな彼の信念の上に成り立つて居る。まことに言葉こそは、人のなすわざと、思ひはかる心との最も端的な反映である。いや反映といふよりは、むしろ事、心そのものであると言つて宜い。特に我々が過去を知らうとする場合、何よりも直接な手がかりとなるものは、古書によつて伝へられた言葉の外にはない。

学問は所詮実証的でなければならない。実証とは最も確実な事象を捉へ、その上に立つて考察し推理し判断する事である。だからもし人が過去を論じようとして、古い言をおろそかにするならば、何所に我々は信を寄することが出来るであらう。しかもそのやうな信を寄せ難い立論が、今の世にはあまりにも数多いのである。ここに「江戸時代語の研究」と題したささやかな著を思ひ立つたのも、宣長の主張に従つてまづ言を知りたいと考へたからである。もとよりその成果は宣長の偉業に比ぶべくもないので

あるが、江戸文芸に語られた言を通じて、江戸時代の事と心とを究めようとする志に変りはない。ただ自分の力が乏しいのを憾みとするだけである。

本書にはなほ近松以後の浄瑠璃、西鶴以後の浮世草子、洒落本、黄表紙、雑俳等の言葉、並に特殊語に関する研究も収める予定であつたが、出版上の種々の制限からそれらはすべて続篇に譲らねばならなくなつた。遺憾ではあるが、一冊の単価があまりに高くなる現在としては仕方がない。なほ本書が成つたのについては、昭和九年から十一年に亙つて、日本学術振興会から与へられた援助に対し、深く感謝せねばならない。その後或は全く独力で、或は一時三省堂の辞書編纂事業の一部に加へられて、仕事は今日までずつと続けて居るが、何といつても学術振興会の援助がなかつたならば、研究は容易に緒につく事が出来なかつたであらう。

本書は言はば江戸時代語辞典の副産物として成つたものである。各種の江戸文芸を通じて、語彙・語句の蒐集整理が基礎的な仕事としてはじめられた。江戸時代の文献は非常に多く、それだけこの仕事はいつ終るといふ際限も定め難いのであるが、今は姑くこれまでの基礎工事をもととして、江戸時代語辞典の編纂に進まうとして居る。すでに辞典用の原稿も幾許かは出来て居り、又現在余暇のすべてはその原稿作製に費されて居る。しかし前途はなほ遼遠である。本書はその長い道のりの間の里程標とも見られよう。また辞典の説明は簡略を主とせねばならない為に、そこで言ひ尽せない事を述べる料ともしたいと思つたのである。

自分がかうして江戸時代語の研究に志したのは、一に恩師藤井乙男先生の感化にあると言つて宜い。先生があの尨大な『近松全集』の註釈に払はれた努力を思へば、感激はなほ新たなものがあるのである。

その先生も今はすでに亡い。貧しい業績ながらも本書を先生の霊前に捧げて謹んで学恩を謝する。又辞典用のカードの書写整理に手伝ってくれた亡き長女中山信子の為にも深く冥福を祈る。

本書の題簽は父頴原謙三の筆になった。父は今年八十三歳なほ矍鑠として郷里に余生を送って居る。ついで、「続江戸時代語の研究」が出る日にも、また父にその題簽の揮毫を得たいものだと念じて居る。

昭和二十一年八月十六日夜大文字の火を望みつゝ

著者識

一　序説

この十数年来の日本の教育では、真理は探求すべきものではなくして最初から与へられ定められたものであった。もとより心ある学徒は黙々と探求をつゞけたであらうが、少くとも一般的表面的には、かうした勝手な公理の下にすべての学問が取扱はれねばならなかった。そこから正しい帰結が望まれない事は当然である。中でも国の歴史・伝統・古典等々に関する問題は、真に自由な人間としての立場から、今あらためて公正な眼で見直されねばならない。例へば江戸時代の文芸に対する評価の如き、果して偏頗無きものであったと言ひ得るであらうか。

江戸文芸の歴史を繙けば、そこには西鶴が居り、芭蕉が居り、近松が居り、蕪村が居り、又京伝・馬琴・三馬が居る。成程文芸の士としての彼等に対する取扱は、必ずしも不当なものではなかった。けれ

ども彼等の作品を古典として見ようとする場合、人は多く難色を示すのが常ではなかつたらうか。『古事記』や『万葉集』が国の重要な古典たるべき事は勿論である。同時に西鶴や芭蕉の古典性もまた決して軽んぜられてはならない。しかも彼等に与へられた地位は、どれほど高いものであつたらう。西鶴の如きはその古典たるべき資格を認められず、却つてこれを奪はれようとさへして居たのである。さすがに国文の学に携はるほどの者には、西鶴を淫靡な小説の作家として批難したり、芭蕉を隠遁的消極的な詩人として排するやうな無理解は見られなかつた。とはいへ西鶴の小説や芭蕉の俳諧に、かの偏頗な公理の適用される度が少いかぎり、彼等の古典性が積極的に支持される事は望まれなかつた。

江戸時代の文芸に於ける古典性を論ずる場合、そこに上代・中世以来の我が文芸精神の伝統がいかに保たれて居るかといふ事は、もとより重大な観点にちがひない。しかし伝統とは何であるか。ただそれが古い姿のまゝに伝はつて居る事を言ふならば、それは単なる過去の形骸にすぎない。伝統とは常に古きものが新しき世界に生かされたものでなければならない。人は西鶴の古典的意義を説く場合、彼が仮名草子の功利的立場を脱却して、真に現実を描き得た作家である点を強調する。又芭蕉の古典性は、彼が中世文芸のさびの理念を俳諧の理念として新しく伝へた所に、最も大きく認められて居る。もとよりこの見方は誤つては居ない。けれども二人の作品の古典性が伝統の如何だけで決定されるならば、芭蕉は確かに西鶴より優位にあると言へよう。それも一往は肯定してよい。だがそれにしても同じ時代、同じ社会に生きた筈の二人が、一はむしろ旧文芸の伝統を破つた所に意義が認められ、一は正しく旧文芸の伝統を守つた所に意義が認められる。そこには不思議な矛盾が感ぜられるであらう。作品の古典性が歴史の制約を免れないかぎり、このやうに相反する相違は単に作家の個性によるものとしてのみの解釈

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は許されない。勿論この矛盾は極めて皮相な見解が齎したものにすぎなかつた。二人の古典性について究むべき問題は、実はなほ外にあつたのである。即ち西鶴の意義は彼が現実を描いたそのことよりは、如何なる立場にあつてそれを描いたかに求められ、芭蕉の意義もまたさびの伝統を保つたそのことではなく、如何なる世界にそれが保たれたかに求められねばならぬ。さうしてそこに彼等に共通する歴史性が確められ、同時に彼等の古典性に対する正しい見解も得られるであらう。

言ふまでもなく文芸を形成するものは、その内容たるべき素材とこれを表現すべき言語とである。而してある作品が歴史上のある地点に置かれる事は、畢竟その作品を形づくる素材・言語が、作家の生きた世界に求められて居る事を示すに外ならない。真淵が万葉語を用ひて万葉風の歌を作つても、それはやはり江戸時代の、そして真淵の歌である。たとひ素材も言語も古い過去のものであるにせよ、それを駆使する作家自身は江戸時代に生きた人であり、さうして彼の思想も感情も知識も、彼が現に生きた時代と環境から逸脱する事は出来ない筈だからである。この意味ですべての文芸作品は作家自身の生を表現したものと言ひ得る。ただし作家が生きる世界に対する自覚は必ずしも一様ではない。そこに作家としての個人差がある。もとよりその自覚が深ければ深いほど、作品の中に描かれる生はその実相を明かにし、又その意味を深く語るに至るであらう。所詮人間を離れ生を離れて文芸はない。さすれば作家の優劣は彼が如何によく生の真を捉へ、又これを現はして居るかによつて決せられねばならぬ。ある作品が古典として現代になほ意義をもつといふのは、そこに描かれ語られた生が、我々の現実の生活に方向を示し活力を与へるからである。古典に於ける伝統の意義は実にこゝに存する。だからそれが真にすぐれた作品であるならば、そこに示された生はそこだけで終るものでなく、永遠に人々の心に生きるもの

でなければならぬ。

人は現実に生きるかぎり常に何等かの限定を受けて居る。何人も免れないものは死の限定である。しかも人はそのやうな有限の世界にあつて、無限を恋ふることを決して止めない。宗教も哲学も人間のこの本然の願ひから生れた存在である。文芸に求められるものもまたかうした人間の魂の解放であつた。人はやはりそこに永遠への思慕を寄せようとするのである。だから文芸に描かれた生の中には、人間性の自由へのあこがれがなければならない。もとよりこの自由は現実から解放される事ではない。現実の桎梏の中にありながら、それを超えて生くべき世界の発見である。さうしてこのやうな世界は、現実の生を確実に生きる人々によつてのみ正当に見出されるであらう。何故ならば現実を真に知るものにして、はじめて如何にそこから解放されるべきかを知り、又解放への意欲は最も強くはたらくにちがひないからである。然るに現実の生は絶えず流転して暫くもとゞまる時がない。このやうな生の真実を捉へ、しかもそこに永遠を見ようとするには、刻々に過ぎ去り行く生の瞬間ごとに、その瞬間を最も確実に生き得ねばならない。その場合人はたゞ現実に直面するのみである。そこには一切の虚偽と因襲の介在する事を許さない。結局流転の中にあつて永遠への思慕を支へるものは、あらゆる虚偽の覆ひを除き、因襲の殻を脱して、直に人間と生との真実に肉薄する精神の強さであつた。このやうな文芸観に立つて新たに西鶴や芭蕉の古典性を考へるならば、その優劣の判定の如きは簡単には下し得ないであらう。

芭蕉が流転する生の瞬間ごとを如何に確かに、かつ新しく生きようとしたかは、彼の俳諧に於ける軽みの精神がこれを明かに示して居る。軽みとは絶えず移り変つて行く現実に応じて、その中から常に新しいさびの美を見出さうとする理念であつた。しかし彼が俳諧に於てまづ見出したものは、さびの伝統

ではなくして民衆の通俗卑近な現実生活であつた。彼の俳諧が一度談林俳諧の洗礼を受ける事無しには生れ得なかつた所以を、ここで更めて考へて見ねばならない。彼はまづ現実の通俗な生を確かに捉へ、その中に自ら強く生きながら、しかも永遠への思慕をさびの伝統に寄せようとしたのである。伝統は中世文芸からのものであつたとは言へ、それが保たれたのは決して中世文芸的な素地に於てではなかつた。「春雨の柳は全体連歌なり、田螺取る烏は全く俳諧なり」と明かに言つて居るのである。古典としての芭蕉の意義が、何処に最も深く認められねばならないかは、もはや多く語るまでもなからう。さうして古典としての西鶴の意義も、また同じところに見出さるべきは当然である。言はれる如く西鶴の小説は、中世文芸の因襲の中からはじめて人間を解放したものであつた。例へば侍従の局と賤しい田舎漢との結婚が人々に承認される為には、物草太郎が御多賀の本地であるといふ超現実的な権威によつて支へられねばならなかつた。それが御伽草子の世界である。しかし『大下馬』の一篇「忍び扇の長歌」に描かれたある大名の姪と賤しい男との結婚は、生きた人間が世俗の因襲に反抗する姿に外ならなかつた。こゝに我々は西鶴のすぐれた古典性を見ようとする。確かに彼は超現実的な御伽草子、功利的な仮名草子の立場を脱却して、現実の生そのものに対することが出来た。けれどもその場合彼が新しく拠つた立場は何であつたか。それは必ずしも厳密な意味の写実的立場ではなかつた。もとより西欧の自然主義作家の如き自覚の下に、『一代男』の稿を起したのではない。『一代男』は周知の如く世之介を主人公とした五十四の短篇から成つて居る。しかしそれが源氏の俳諧化だと言はれるのは、そのやうな五十四帖を模した形式的な面についての謂ひではない。又談林の俳諧に於て、釈迦や孔子までを延宝の世の人間に引下したのと同じ意味だとのみも解釈されない。勿論光源氏を当時の遊蕩児世之介に化身せしめたのにはち

がひなからう。だがその好色生活を一篇の小説として描かずに居れなかつたのは、西鶴自身が生きた浮世の相にやはり一の美を感じたからであり、その美とは作者の自覚の有無にかゝはらず、結局王朝の物のあはれに通ずるものであつた。言はば源氏物語の先蹤なしには、西鶴はこのやうな素材を小説化するだけの芸術的感激へ導かれる事はなかつたのである。して見ればこゝにもまた中世文芸の伝統理念は、大きな力をもつてはたらいて居ると言はねばなるまい。

西鶴に近代的な知性の批判と反省とを欠くことは認めねばならない。それ故に彼の小説にはあれほど現実の相を鋭く深く剔抉しながら、そこには例へば新しいモラールへの示唆などは殆ど見出すことが出来ない。かの『本朝二十不孝』の如きは、人間の悪のみを描いて少しの救ひも無いと言はれる。又『大下馬』『桜陰比事』等の作にあつては、現実を描くといふよりも、明かに興味本位の話を主にして居ることは疑ひない。人は彼の小説から何処に永遠への思慕を求め得るのであらうか。しかし西鶴に於ける知性の欠如は、むしろ江戸時代の庶民文化の本質そのものへ向けらるべき問題であつた。我々は強靭な力で現実に生き、さうして所謂浮世の人間の実相を容赦なく描いて見せた天才の存在に、やはり満足の意を表さなければならない。永遠への強いあこがれが、常に現実への深い省みに根ざして居る事を思へば、好色生活に対する飽くなき追求も、金銭をめぐるあさましい欲念も、また恐ろしいまでに根深い悪も、そこに知性的な批判の眼が向けられて居ないにせよ、永遠を思ふ人々にとつて多くの意味を提供するであらう。のみならず『一代男』や『一代女』の主人公が、浮世の好色を見尽した果に、静かに思ひめぐらしたものは何であつたらう。女護島への船出や思はくの五百羅漢は謂はゆる転合書（てんがうがき）であるにしても、そこには生に対するある諦観と、さうして永遠への思慕がやはり見られないであらうか。勿論この

諦観は中世文芸の無常観から一歩も出たものではない。しかし「時の間の煙死すれば何ぞ、金銀瓦石には劣れり、黄泉の用には立ちがたし」と言ひながら、又「然りといへども残して子孫のためとはなりぬ」と続ける事を忘れなかつた西鶴である。一代男や一代女の諦観は決して中世文芸の無常観をそのまに仮りた徒らな感傷ではなかつた。それは西鶴自ら確かに踏みしめた生の中に一度入り、またそこから投射されたものであつた。西鶴の拠つた文芸的立場は、かうして結局中世文芸の理念の外に出たものではない。しかもその伝統は彼自身の生きた世界に於て、新しく生かされて居るのである。それだけに今も我々を動かす力は大きい。さうして西鶴の古典性もまた芭蕉のそれと実は異るものでない事を知るのである。

江戸前半期の文芸に対しては、その古典性についてなほ偏頗な見解を免れなかつたとはいへ、西鶴や芭蕉や近松は決して無視される事はなかつた。然るに江戸後半期の文芸に至つては、近来長い間殆ど顧みられなかつたのではなからうか。京伝・馬琴・三馬・一九・種彦等の名はなほ忘れられて居なかつたとしても、彼等の作品を正当に理解しようと努めたものはどのくらゐ有つたであらう。それらの作品が軍国主義本位の公理の下に無価値であるといふ程の偏頗な立場は、すでに論外に置いて宜いにせよ、少くとも彼等が西鶴や芭蕉に比して、専門の学徒からさへも軽視されて居た事は事実である。真に人間の生を描かうとする意欲の強さが、文芸としての優劣を決するならば、それは当然であると言つても宜い。特に洒落本・人情本等の末流や、謂はゆる狂句化した川柳・雑俳の類に至つては、わづかに国語学・風俗史等の資料価値をもつに止まり、もはや文芸としての研究対象とするに足りないのである。それにしても洒落本・黄表紙・川柳・滑稽本等が如何にして生れるに至つたかを考へる時、それらすべての作品

を単に市井の低級な文芸と見て、そこに何等の古典性をも認めようとしないのは、果して公正な学徒の態度とされるであらうか。安永・天明の頃まですでに百数十年の泰平がつゞいて居る。それからもまた百余年の平和の時が流れた。江戸後期のあらゆる文芸は、要するにこの長い平和の頂点に生れたのである。長い固定した平和は日本の政治にとつては、必ずしも喜ぶべきものではなかつた。封建的機構の驚くべき整備は、人間の生活を再び形式化因襲化させるの止むなきに至つた。かつて西鶴の小説に解放された人間、芭蕉の俳諧に志向された永遠、それらの姿が次第に薄れ行く淋しさを人は感ずるであらう。さりとて江戸後期の作家たちのすべてが、人間の形骸のみしか描き得なかつたのではない。文字通りの所謂戯作として、これを低く評価し去る事も早計である。何よりも文化が平和によつてはじめて醸成され、文芸が文化の相を最もよく反映するものである事を思ふがよい。三百年の間国内に干戈の動きを見なかつたといふのは、恐らく世界の歴史でも極めて稀な事例であらう。それならば江戸後期の文芸に、何等かの意味での高い文化が示されて居るべきは疑ひない。さうしてそこにそれらの文芸の古典性が求められるのではあるまいか。

江戸時代の文芸の最も大きな特質は、その発生と展開とが従来の文芸素地と全く異質な民衆自身の文化の中に行はれた事にあつた。民衆が自ら文化の成育進展にあづかり、かつその成果を自ら享受し得るといふ事は、我が国史の上では江戸時代に於てはじめて見られた事であつた。民衆の政治への参与はなほ許されなかつたとは言へ、文芸・絵画・工芸等の部面で如何に彼等が独自の地位を占め得たかは、ここに更めて説くまでもない。今や文芸に於ても美術に於ても、そこに志向されるものは宮廷文化乃至貴族文化へのあこがれではなくして、民衆自身の生活の讃美であつた。かくして浮世草子が生れ浮世絵が

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com